慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ペルシャ文学と巡礼
Sub Title	Pilgrimages in Persian literature
Author	中村, 公則(Nakamura, Kiminori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1995
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.64, No.3/4 (1995. 4) ,p.73(327)- 83(337)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19950400-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ペルシャ文学と巡礼

中村公則

一、はじめに

巡礼は六信五柱の一つなのであるから、イスラーム圏の文学で題材として取り上げられることが多くても何の不思議もない。従って巡礼について扱った文学作品を丹念に渉猟していけばゆうに一巻の大著がものせるであろう。しかし本稿では、代表的な文学作品の中で巡礼というものがどういう風な扱われ方をしているか、先づは里程標を示すにとゞめておきたい。

ところで巡礼文学と称すべきものもある。例えば、ナーセル・ホスロウ（一〇〇四年生まれ）の『旅の書』は、内容的には巡礼記であるが、その簡潔な文体故にペルシャ文学史上高い評価を受けている。それ故巡礼文学と呼ぶにふさわしいものである。たゞナーセル・ホスロウについては、既に黒柳恒男氏が『ペルシャの詩人たち』の中で一応の紹介をしているので本論では割愛する。

二、カーブースの書

第四章逸話に於てブハーラーの長（おさ）と貧乏人の間に交わされた対話が紹介されている。[1] 資力もないのに巡礼をすると身の破滅になるであろうということがコーラン第二章一九一節の教えを敷衍して説かれている。又逆に、ケイ・カーヴースに依れば、巡礼はそれを行う力がある場合には、免れ得ない義務なのである。

三、七王妃物語

ネザーミー（一一四一年頃～一二〇三年乃至一二〇九年）の『七王妃物語』二七章で、禁欲者（parhīzgār）

バシュルと呼ばれていた男が一人の月の美女に魅せられる。自らの欲情を棄てる爲エルサレム巡礼を果して帰国する。「巡礼地」[2]に当るペルシャ語原語はziyāratgāhが使用されている。巡礼についてはこれだけしか触れていないが、バシュルはその後悪人と出会っても善良さを失わず、貪欲にとらわれることがなかったので、恩寵に依り、嘗て出会った美女にめぐり逢い妻に娶ることを赦されるという話である。この物語の中では、巡礼が特別な重要性を付与されているという訳ではないが、ともかく効験あらたかなものという取り扱い方はされていると言ってよい。

四、ルーミー語録

『ルーミー語録』にはメッカ巡礼の持っている決定的な意義が明示されている。談話――其の十八――[3]では、或る男がメッカ巡礼の旅の途中砂漠にさしかかって、喉が渇き、ベドウィンに水を所望する話がさらりと紹介されていて、巡礼行の困難さが暗示されているだけである。しかし談話――其の二十三――では、メッカの聖所に入ることは即ち神と合一することであると断言されていて、メッカ巡礼の意義が明らかにされている。[4]さらに談話――其の二十六――を読むと、イスラーム神秘主義者にとってメッカ巡礼が如何に重大な意味を持っているかが理解できる。無生物が生命体になり、さらに植物から動物になり、遂に人間となるという長い旅の最終段階に神秘主義悟道というものがあり、終着駅がメッカの聖所なのである。[5]

五、薔薇園

サアディー（一二九二年歿）の諸国遍歴は三十年もの長きに及び、メッカ巡礼も十四回したと伝えられている。従って巡礼への言及も多い。

イスラーム神秘主義者達は一体何の爲にメッカへ行くのか？『薔薇園』第二章物語二にはサアディーなりの解答が示されている。サアディーは、自らの信心が足りないことを詫びる爲にカアバの神殿にやって来たダルヴィーシュを高く評価している。[6]カーディリーヤ教団の創始者がカアバの神殿で述べた言葉が同章物語三で紹介されているが、同趣旨の話である。[7]

第二章物語十二では、メッカ巡礼がいかに難行苦行であるかが如実に語られている。睡眠不足で歩行困難に陥ったり、身体が痩せ衰えたり、盗人が背後に迫って来

たりする旅なのである。[8]

第二章物語十七からメッカ巡礼行の困難さがしのばれる。頭巾もかぶらず、裸足で無一文のダルヴィーシュがサアディー達の巡礼隊[9]に加わった。駿足の馬が途中で斃(たお)れ、駱駝に乗っていた富者も死んでしまう旅であったが、くだんのダルヴィーシュは無事目的地に行き着くという話である。

第二章二十七では、メッカ巡礼の途次、或るアラブ人少年の美声にめぐり合った逸話が紹介されている。[10]

六、ハーフェズ詩集

ハーフェズ（一三二六年頃～一三九〇年）程の神秘主義者がメッカ巡礼を行った形跡がないのも一寸不思議である。少くとも文献の上では巡礼に行ったという証拠はないようである。ペルシャ文学史上著名な神秘主義詩人でメッカ巡礼行を果した者は結構いる。例えば以下に列挙した詩人達は付記せる年に巡礼を行っている。

ハーカーニー　一一五六～七年
サナーイー　一一〇五年頃
アンサーリー　一〇三一年前後
エラーキー　一二五五年以降？[11]
ルーミー　一二一九～一二二二年の間[12]
キャマール・ホジャンディー　十四世紀中[13]
ジャーミー　一四七二年
サーエブ　十七世紀初葉

ところでハーフェズはエスファハーンやヤズドへの旅を除いて郷里のシーラーズを殆んど離れることがなかったようである。彼が何故メッカ巡礼をしなかったか、その理由を尋ねるならば、二六〇歌を読むとよい。

del kæz tavāfe kaʔbeye kūyato qouf yāft az shouqe ān harīm nadārad sare hejāz[14]
（心は貴方に至る細道を廻ることを覚えてしまったので、その聖域に熱中するあまり、ヒジャーズに行くことなど念頭に浮かばない）

こゝでイラン人が通常行うように神秘主義的解釈を施してみるならば、「貴方」とは「神」のことであり、「貴方に至る細道」とは「神秘主義悟道」を指すことになろう。さればこの一句は、神秘主義者としての修業に夢中だか

らメッカ巡礼に行く気などしないという意味になる。

そのほかhaji（巡礼）という言葉は、一三一歌[15]に出てくるが、同じ行と一三二歌[16]ではziyārat（巡礼）という言葉が使われている。前者ではrūze（断食）とhajiを並べて「その功徳を」と言っているので、こゝではメッカ巡礼を指すと解してよかろう。後者では「愛の居酒屋の土」にziyāratすると言い、「居酒屋」にziyāratしたと述べているので、こゝでの"ziyārat"は敬虔な気持で参詣したことを指す。ハーフェズは両者を区別して使っているようである。

iḥrām（巡礼衣）という言葉もたびたび使用されている。例えば、七〇歌[17]や八二歌[18]。メッカ巡礼のイフラームは清浄な白衣でなければならぬ所から、清らかなものを指す時の文学的修辞として使用され得る。

haram（聖地）という言葉もメッカのカアバ周辺を指す修辞として七八歌[19]で使用されている。

kaʾbe（カアバ神殿）という言葉は、三十歌[20]、四十歌[21]、五二歌[22]、二〇八歌[23]、二五五歌[24]などで文学的修辞として使用されているだけである。

七、地の呪い

イランはサファヴィー朝のシャー・エスマアイールが十二イマーム派シーア主義を国教と宣言して以来、一世紀位かけてシーア派の国になっていった。シーア派第一の聖地が東北部にある宗教都市マシュハドである。マシュハドには八代目イマーム・レザーの聖廟があり、今日も多くの巡礼を惹き付けている。

『地の呪い』は一九六七年に刊行された小説であり、作者はイランの知識人に大きな影響を与えた作家ジャラール・アーレ・アフマド（一九二三～一九六九）である。この小説の天蠍宮3で地下導水溝の修理夫親方がマシュハド巡礼の途次道中で十人が行き倒れになったこと、三人がコレラにやられて死んだこと、総勢十四人のロル族の男達のうち最後の一人は下痢になったことを話題にしている[25]。小説は所詮仮構であるが、二十世紀に入っても巡礼行の困難に変わりがなかったことは事実であったろう。

現在イラク国内に在るナジャフもシーア派の人達にとって聖地としての権威を失っていないことが同書人馬宮2の記述から分る。人々がナジャフにいる高僧に教令

を求めて手紙を出したことが述べられている。[26] ナジャフには初代イマーム・アリーの聖廟があるのである。

サファヴィー朝のアッバース大帝がしばしば徒歩でマシュハド巡礼を行ったことは事実であるが、この小説でもこのことに触れた箇所がある。[27] しかし作者はその際エスファハーンからマシュハド迄蜿蜒と絨緞が敷きつめられたという民間に流布された噂を一笑に付している。又、この作者はカルバラー悲史を哀悼して行われる胸打ちや頭打ちを khūnrīzīhā（流血沙汰）と蔑するような口調で批判している。[28]

マシュハド巡礼には夫婦同伴で行くこともあれば、男が単身で出掛けることもあるようである。このことは人馬宮3で「ヴァリー・ベグ自身も十日前マシュハド巡礼に旅立った」とあることから知られる。女房が入院中であることはその前で述べられている。[29]「巡礼」に当る言葉としては ziyārat が使用されている。

八、ハージー・アーガー

『ハージー・アーガー』は、イランの巨匠サーデク・ヘダーヤト（一九〇三～一九五一）が著した中篇小説である。この小説の梗概は、『オリエント』第三六巻第二号の短報に紹介しておいたので、そちらを参照して貰えれば幸甚である。ペルシャ語で hājī とは「メッカ巡礼者」のことを言う。この小説の主人公は人々から「巡礼なさった方」（hājī āghā）という通り名で呼ばれている政商なのだが、実際にはメッカに行ったことなぞない。父親がメッカ巡礼を果していた人物だったので、土産話などを聞きかじって覚えておき、その話を受け売りしながら、あたかも自身メッカに行ったことがあるかの如く装って、ちゃっかり〝ハージー・アーガー〟になりおほせているペテン師なのである。[30] こういうペテン師が第二次世界大戦前後のイラン社会に於て実際にどの位存在していたかは全く分らない。あちこちそういう実例があったとすれば、世間で〝ハージー・アーガー〟と呼ばれているからといってその人物が文字通りメッカ巡礼を果した人物であるとは限らないということになる。

九、赦しを求めて

やはりサーデク・ヘダーヤトがものした短篇小説 "Talabe Āmorzesh"（赦しを求めて）は、一九三二年に刊行された短篇集 "Se Qatre Khūn"（三滴の血）の中に収載されている。この小説では、三代目イマームのフサ

インが殉教した地カルバラーへの巡礼行が扱われている。フサインの墓に詣でることによって、殉教の苦難を追体験したような連帯感をシーア派の人達は持つらしい。メッカ巡礼は「そこに行く余裕のある」全ムスリムに課せられた「義務」であるが、カルバラーやナジャフへの巡礼は聖法（シャリーア）に義務として明記されていない自発行爲である。だがこの小説の大団円にもある通り、「巡礼者は巡礼しようと決心して出発した瞬間、その罪が木の葉より多くても、浄められ、如法になる」と信ずる人達もいるようである。この罪障消滅という考え方に対する揶揄が作者の執筆目的の一つであった如くである。登場人物の一人アズィーズ・アーガーは夫の共妻（ハヴァー）の子を二人も殺したので、その罪障消滅の爲にカルバラーに行こうとしている。又ギャリーン夫人という女性も夫の財産が共妻の手に渡らぬようその共妻を殺してしまったので、カルバラーで罪障消滅を得んと念じている。マシュディー・ラマザーン・アリーという男は、ホラサーン街道で御者をしていた時、道中で馬車がこわれ客のうち一人が死に、もう一人は彼が絞め殺して、隠しから千五百トーマンを失敬する。のちこの時の悪事に気がとがめた彼はカルバラーに行って tathīr（お浄め）をして貰う。ウラマーに千五百トーマンを差し出したら、千トーマン返してくれたという。これで千トーマンは如法の金ということになり、五百トーマンはウラマーのふところに入るという寸法である。サーデク・ヘダーヤトはこうしたやり方に批判的であった。

『赦しを求めて』にはもう一つ重要な資料的記述がある。巡礼行の中でうたわれる御詠歌が紹介されているのである。以下の如し。

先づ先導者が一句を吟ずる。
「カルバラーを憧憬する者皆ビスミッラー
共に行かんとする者皆ビスミッラー」
別の者がそれに答える。
「カルバラーを憧憬する者よ、幸いなれ！
共に行かんとする者よ、幸いなれ！
再び先導者言う。
「おゝ、カルバラーよ。
聖都を臨みて我らの良心は疼く。
ザイナブの哭きぞ今なお聞ゆる。」
これに答えて又言う。
「カルバラーを訪れたる者に、

神の恩寵がありますように！
哀れな我を神の犠牲たらしめよ！」
先導者が旗をひるがえして大声を張りあげる。
「唱和せざる者の舌は切られるがよい。
神の最愛の人、預言者中の預言者、
ムハンマドに祝福を！
アリーの十一人の後裔に、アブー・ターリブの子に、
それぞれ祝福をたれ給え！」

各唱句の最後は巡礼者全員が声を合わせて唱え、神への感謝を捧げる。[32]

十、アラヴィーイェ・ハーノム

"Alavīye Khānom"は原文で四六頁になる短篇小説で、マシュハド巡礼行の物語である。作者は同じくサーデク・ヘダーヤト。舞台となったマシュハドは現在人口一四六万以上の大都市である。筆者も一九七六年八月十一日に当地を訪れたことがある。夕方四時にテヘラン発の列車に乗って翌朝七時頃にマシュハドに到着した。快適な旅であった。しかし『アラヴィーイェ・ハーノム』が書かれた当時[33]は、四頭立て馬車に乗って非常な困難を余儀なくされる巡礼行であったかと推測される。小説に登場する巡礼客の一人マシュディー・マアスームが語った話では、二年前同じ所（即ちナマク村とアブドッラーアーバード村の間）を通った時、隊商が一団の狼に襲われ、二歳の子供が喰われてしまったという。[34] 実際にも、これと同じような事件が起ってもおかしくない程さまざまな危険が一杯あったに違いない。テヘラン―マシュハド間の鉄道が敷かれたのは第二次世界大戦後のことなのである。

小説中の巡礼行は次の様な経路をたどって行われる。即ち、

テヘラン→Eivānekey→Qeshlāq→Ārādār→Pāde→Namak村→セムナーン→マシュハド

という行路である。小説中に登場するこれらの地名のうちQeshlāqを除く地名は全て、四年前に発行されたイランの道路地図にも掲載されている。Qeshlāqという地名はイランには沢山あり、小説中でのQeshlāqはおそらくLudwig Adamecがハル地区にあると言っている小村と同定され得よう。[35]

小説中に登場する人物名は次の通りである。

Alavīye Khānom（女）――女主人公

Zīnat Sādāt（女）
Talʔat Sādāt（女）　}アラヴィーイェ・ハーノムの子
Esmat Sādāt（女）
Āghā Mochūl（男）――語り部
Yūzbāshī（男）――馬車の御者
Panje Bāshī（男）――靴修繕屋、のちマシュハドで語り部
Jeyrān Khānom（女）
Naneye Habīb（女）　}巡礼客
Naneye Golābetūn（女）
Fezzbājī（女）――黒人女中
Mashdī Maʔsūm（女）――癩病の巡礼客
Soghrā Soltān（女）――巡礼客
Rajab Alī（男）
Mashdī Karam Alī（男）　}御者
Abbās Qolī（男）――聾唖者
Salmān Beg（男）――トルコ人巡礼客
Sāheb Soltān（女）――マシュディー・キャラム・アリーの一時妻でアラヴィーイェ・ハーノムと喧嘩

ざっと登場人物を眺めるだけで、この旅の陰鬱な雰囲気は想像がつくであろう。旅は冬の「白雪に覆われて果てしない広がりを見せている荒野」[36]をついて、フェルトの幌馬車が何台も隊商を組んで「百足のように難路の街道を辷」[37]って敢行される。夜はカンテラの照明がともされる。「街道の旅は単調で退屈だった。」[38]アラヴィーイェ・ハーノムは子供達に悪態の限りを盡しながら、馬車の同乗客達と四方山話をする。彼女の娘エスマト・サーダートがアブドル・ハーレグという男の一時妻になったことがあり、「ハージー階級の人間と結婚沙汰なんてもう二度としたくない」[39]と言う。メッカ巡礼に行けるような金持階級と付き合うのはもういやだと言っているのである。

原文三十頁十四行目からアブドッラー・アーバード村の隊商宿の模様が描かれている。シャー・アッバース時代様式の隊商宿である。門には人間の骸骨が二つ漆喰で固めてある。盗賊共を威嚇する爲である。馬車は玄関から四角い中庭に入って行った。中庭の真ン中は駱駝や騾馬から荷揚げをする爲の大きな壇が設けられていた。イーワーンを取り囲むようにして仮迫持や、牢獄の様に狭くて暗い部屋が旅客用に連なっている。アラヴィーイェ一家は、パンジェバーシー、フェッゼバージーやハ

ビーブ達と一室に入る。石油ランプを点けてみると、部屋は煤だらけの荒壁土に囲まれた暗い一つの穴蔵の様な感じの所であった。部屋の天井から燕の巣がぶらんこの様に吊り下っていて、その下には糞が堆積していた。誰かが吐いたつばのしみが壁に残っていた。部屋の隅にかまどがあり、別の隅には油で汚れたボール紙や破れた団扇や屑が集め寄せられていた。こんな部屋の中に火鉢の火が点けられ、また旅人達の会話が展開されていく……

『アラヴィーイェ・ハーノム』に於て最も興味深い叙述は冒頭の幕芝居の場面である。あたかも紙芝居を見せるが如くに、壁に幕を垂らして人々にカルバラーの悲史を語って聞かせる商売が存在していたらしい。アラヴィーイェ・ハーノム一家は、これをなりわいとする一種の大道芸人の一座なのである。原文を引用してみよう。

「両端が巻かれた幕の上にはヤズィードの絵が描かれていた。玉座が上座に据えられ、赤い巻頭巾を巻いて赤服を着たヤズィードがその上に座って双六に興じていた。傍には葡萄酒の壜と林檎や梨を盛った盆が置かれていた。緑色の巻頭巾を巻いたカルバラーの捕虜の一群が、頸を鎖でつながれ、悄然とうなだれた儘ヤズィードの前に引立てられていた。三人の兵士が厳重に彼らを見張っていた。髭をぴんと生やし、それが耳たぶから突き出ていた。帽子に赤い羽根を挿し、抜身の剣を手にし、ふくらんだ袴の様なズボンの先が深靴の内側に押し込まれていた。」

これは貴重な叙述である。シーア派の人達が殉難劇（taʔzīye）や殉難追悼朗誦会（rouzekhānī）や胸打ち（sīnezanī）を行ってカルバラーの悲劇を哀悼することは良く知られているが、幕芝居では、アーガー・モチュールという若者が、シーア派にとって聖なる色とされる緑色の頭巾を巻いて語り部をつとめている。彼は話の途中で観衆に呼び掛け、見物料を投げて寄越す様懇請する。三リアル七シャーヒーしか得られなかったと言ってアラヴィーイェ・ハーノムがこぼす。これでは四人の子供を養えないと言うのだ。[40] しかし最高に稼いだ時は一回の興行で十一リアルの収入になったという。[41]

註

（1）Reuben Levy 校訂 "Qābūs Nāme" (London, 1951) p. 13～14

（2）"Kolliyāte Khamseye Hakīme Nezāmīye Ganjeʔī" (Amīre Kabīr, 1351) p. 727

（3）井筒俊彦訳『ルーミー語録』（岩波書店）一四四頁参照。

(4)　同一七四頁及び一七五頁
(5)　同二一〇六頁～二一〇七頁
(6)　Mohammad Alī Forūghī 校訂 "Kolliyāte Sheikh Saʾdī" (Enteshārāte Zarrīn) p. 109
(7)　同 p. 110
(8)　同 p. 114
(9)　kārvān という言葉が使われている。同 p. 116 参照。
(10)　同 p. 120～121
(11)　Seyyed Hossein Nasr "Fakhruddīn 'Iraqi" (London, 1982) p. 33 にエラーキーは一一一三年生まれとある。更に次頁で十七歳以降遊行僧の仲間に加わったとある。p. 41 ではムルターンでバハー・オッディーンに二十五年間仕えたとある。メッカ巡礼はそれ以後のことである。
(12)　Rypka "History of Iranian Literature" (Dordrecht, 1968) p. 240 参照
(13)　歿年に関し、Browne "A Literary History of Persia" (Cambridge, 1964) vol. III p. 321 では、一四〇〇～一年説がとられている。リュプカも同様の意見である。Sabā "Tārīkhe Adabiyāt dar Īrān" vol. 3 第二部の p. 1132 に回暦八世紀初葉に生まれ、若い頃メッカ巡礼をしたとある所から見て大体十四世紀の人と言えよう。
(14)　Ghanī 校訂 "Dīvāne Khāje Shamsod Dīn Mohammad Hāfeze Shīrāzī" (Zavvār. 1362) p. 177
(15)　同 p. 89
(16)　同 p. 90
(17)　同 p. 49
(18)　同 p. 57
(19)　同 p. 54
(20)　同 p. 22
(21)　同 p. 29
(22)　同 p. 37
(23)　同 p. 141
(24)　同 p. 173
(25)　Jalāl Āle Ahmad "Nefrīne Zamīn" (Ravvāq, 1357) p. 129
(26)　同 p. 180
(27)　同 p. 185
(28)　同 p. 185
(29)　同 p. 197
(30)　Sādeq Hedāyat "Hājī Āghā" (Amīre Kabīr, (1344) p. 18 参照。
(31)　一人の夫を共有する妻達
(32)　Sādeq Hadāyat "Se Qatre Khūn" (Amīre Kabīr, 1341) p. 76～77
(33)　一九三一年ないし三三年に刊行された本なので、それ以前の巡礼行が小説のモデルになっている。
(34)　Sādeq Hedāyat "Alavīye Khānom" (Amīre Kabīr, 1342) p. 26
(35)　Ludwig Adamec (ed) "Tehran and Northwestern Iran" (Graz, 1976) p. 524 Qishlaq (1)
(36)　"Alavīye Khānom" p. 24
(37)　同 p. 27

(38) 同 p. 27
(39) 同 p. 20
(40) 同 p. 14
(41) 同 p. 17

『史学』第六三巻第三号　正誤表

頁	行	誤	正
二一	下段四	抹消的	末消的
三七	上段九・一〇	上海商務院書館	上海商務印書館
〃	上段一〇・一一	(『民族』第一巻一一、一二号、第二巻第一、二号)	(『民族雑誌』第一巻一一、一二号、一九三三年、第二巻第一、二号、一九三四年)
〃	下段九	商務書院	上海商務印書館
〃	下段一〇	『中国通史』(北京人民出版社、一九四二年)	『中国通史簡編』(修訂本、第一編、北京人民出版社、一九五三年)
〃	上段一八・二二	羸	羸